

近世敦賀の昆布細工考

山本晴幸

一 昆布ロードと敦賀

昆布の名が文献に現われるのは「続日本記」で元正天皇の靈龜元年（七一五）一〇月丁丑、陸奥の蝦夷の請願を容れて、郡家の建置を許可したことを記録した文章の中で、「蝦夷須賀君古麻比留等言。先祖以来。貢獻昆布。」とあるのが最初の記録とされる。又「延喜式」には、「陸奥国昆布六百斤。素昆布六百斤・細昆布一千斤」とあり、平安朝時代には昆布を比呂米（広布）、又は衣比須女（エビスメ）と称していた。エゾに産する広布のような海藻の義ということが由来であろう。又アイヌ語のコムブの音訳ともいわれている。主産地はまさに蝦夷、北海道というわけであるが、古来昆布は、松前より敦賀小浜へ海路運ばれ、加工調製されて京を始め各地へ送り出され、昆布による食文化が、形成されて来たのである

が、この販送ルートが昆布ロードであった。そして中でも敦賀は、昆布ロード最大の中継地として、江戸中期迄は脚光を浴びていたのであり、いわゆる西廻り航路の勃興に至るまでは松前貿易の昆布の本州に於ける最大の荷揚港だったのである。何時頃からその交易が始まったのかは古い記録が無く明確にわからないが、慶長初年と思われる文書に、松前志摩守慶広から敦賀の越後屋平太郎にあてた手紙がある。

「尚々任見来昆布拾駄、御音信計候船御下候二付而、大鉄砲送候、万々畏入候其以来不懸御目、御床付存候、一以下略一恐々謹言」

八月十五日 松前志摩守慶広 花押
越後屋兵太郎殿 参御報

これより先元龜の頃、平松幸熊丸が朝倉義景に昆布一折を賜って居り、又西福寺が滝川一益に昆布百本を天正二年に贈っている。何れもその礼状が古文書に収録されて居り、

（敦賀市史）近江及び京大阪方面への販送ルートとしてだけではなく、敦賀の名産品として贈答用になっていたものと思われる。又時代が降って寛永年間に至り、「小浜藩主酒井直

勝公に敦賀町中年始の御祝儀に差上候進物として昆布貳百本 又老中への進物として昆布百本を献上」している（敦賀貿易史稿）

西廻り航路以前は、海路で運ばれた昆布は敦賀で荷揚げされ、舟運、陸路と運び継がれて琵琶湖舟運で近江を経由して京大阪へと昆布は運ばれたのであるが、しかしそれ以外に陸路丹後街道を西に、小浜藩城下に向けて運ばれて居り、西廻り航路が始まって以後も続いた。小浜の御用昆布商人の天目屋五郎右衛門が敦賀で買付けて運んだのである。そして買付ける時は、敦賀の惣代に立会わせ選別を行なった。小浜市、山名文書にその記録が残されている。

御用昆布持人足差立指令書

覚

一 御用昆布持人足 拾三人

右者、天目屋九郎兵衛昆布御用相濟、今昼立致掃濱候間、右人足拾三人、松明持咄人、

人足拾四人も村々も出之、無滞可持送者也

十一月十二日

敦賀町奉行 印

敦賀小浜濱迄道筋村々 庄屋かたへ御用昆布として買付られた昆布は、「御用昆

布」として敦賀町奉行が觸書を出して丹後街道の道筋の各村々の庄屋に、運び人足、たいまつ持人足等、出役させ夜を徹しても小浜城下まで運ばせたのである。多分荷車に御用昆布の看板をおし立て、十数名の人足によって運ばれたのであろう。

この天目屋は幕末の経済混乱の中で難渋に及び、藩に救恤願を出すのが、藩も救済する力既になく、天目屋は消えてゆくのである。

二 昆布細工と高木善兵衛

明治三十五年に発行された「福井県物産誌」に昆布細工の記述があり、宝暦年間、敦賀の高木善兵衛が創製したもので、その後水口弥五郎、丸屋六兵衛、碗屋茂兵衛等同業が続いてその業を営むようになったとある。しかし、その典拠が明らかではなく、又それ以後の文献もすべて同書からの引用と思われる。そこで高木善兵衛の家譜をたどり、又関係文書を探って考察を試みることにした。

宝暦年間の高木善兵衛は、敦賀市櫻曲かしまがりの高木藤太夫の出で高木善左衛門の分家（二代目の子）であり屋号を米屋善兵衛（米善）と称

して東浜町（現逢来町）で営業を始めた初代である。この家系については、明治二年三代目善兵衛が書残している。高木家の菩提寺である櫻曲の遠慶寺にある寛政四年の大改築の棟札に寄進名列の町方として、米屋善左衛門と並んで米屋善兵衛の名前が載っているが、これは初代であろう。初代米善は、昆布細工の草分けであり、先駆者であったが二代目に至り、文政七年八月小浜藩の出入商人となり、藩候よりの將軍家献上品を調製し、同年九月

昆布細工仲間の設立を許可され、十月には屋根看板を掲げる許可も得る。そして福井を始め越前の各城下に於ても従来行われた御役御口銭と称する一種の仲間手数料を免除されるという特典を得たのである。又加賀、越中、美濃、尾張、伊勢、近江、山城、若狭等八ヶ

国三十有余の城下に販路を拡張し、江戸、京都に支店を設けている。

その後弘化二年、細工昆布仲間より將軍家への献上を願ひ出て許され、仲間の推挙で毎年正月に献上する献上品の製作を担当するのは三代目米善である。以後細工に色々の工夫を加えて好評を博し、販路も益々拡がり同業

者も漸次増加して幾多の年月と変遷を経て、今日の如き盛況を見るに至っている。又細工昆布の一種である刻昆布きざみは、伊藤平右衛門が長崎に於て伝習して来たものと云い伝えられている。高木善兵衛及び細工昆布屋仲間の事は敦賀市史記載の石井左近文書「内職細工昆布差留に付細工昆布仲間願書」で知ることが出来るのである。

乍恐口上書ヲ以奉願上候

一御免御用細工昆布屋仲間之儀ハ去ル文政七

甲申八月從、御上様細工昆布御用□仰付難有

早速奉指上候所 追々御用□誠ニ冥加身

ニ余リ難有仕合と奉存候、然ル処御奉行様江願書ヲ以細工昆布屋□御願申上候処 御聞濟成下置 同九月四日ニ奉蒙御免許、同十月五日ニ屋根看板御免被為下置候 尚此上諸国江広ク売捌敦賀産物ニ可相成様 被為仰付候 夫々仲間一統相励 広ク売捌渡世仕候折

から所々ニ昆布細工仕候者有之ニ付 差留候共聞入不申ニ付 無拠御上様江乍恐御苦勞之儀御願申上候処、文政十三庚寅三月廿九日ニ町内一統御触流被下置 難有仕合ニ奉存候其後も所々ニ細工昆布□候者も有之候得共吟

味仕差留申候所、此節一向猥ニ相成所々ニ細工昆布内職ニ手広ク仕候故、度々差留中処井川の浪人千田半左衛門と申仁、是非共内職細工昆布仕差留申候得共聞入不申夫故、外々ニも細工昆布内職仕 仲間之差支ニ相成 甚以困り入申候 且ハ先達而徒御上様之厚キ御慈悲ニテ細工昆布屋仲間御免許被為仰付 被下置候規矩相立不申 打捨置候而ハ 右様追々増長仕候而ハ仲間一統必至と難渋被相成 御上様江奉恐入候事歎ケハ敷奉存候 何卒御憐愍之御慈悲ヲ以町中一統細工昆布職仲間之外相成不申様□被成下置候ハ、難有仕合ニ可奉存候

右之趣被為聞召分 御憐愍之御慈悲ヲ以、願之通被為仰付被下置候ハ、難有仕合ニ可奉存候

天保二乙巳年

丸屋六兵衛 (印)

十一月

水口弥五郎 (印)

米屋善兵衛 (印)

梶屋太兵衛 (印)

目薬屋次郎兵衛 (印)

昆布はその加工品を含め所謂ヘルシー食品として近年とみに脚光を浴びて来ているが、

古来細工昆布といわれて来たものは副食用の昆布加工品であったが、近世それに昆布菓子加わり、その総称となって来た。最近は更に広範囲にわたる製品が次々と開発されているが、昆布菓子を始めて製造したのは三代目高木善兵衛であった。彼は敦賀の著名な狂歌師山本詞海斎輪田丸の九男で、家業は醤油醸造業であったが、幼名は添之助と云い、母いさ女は二代目高木善兵衛の娘である。天保十一年七月、二代目善兵衛歿した後、添之助養子となり高木家を継ぎ三代目となった。嘉永元年、二十四才の時若年にして早くも肝煎となり、二十七才で氣比神宮の牛腸番ごうちまばんを勤めている。その出生は文政八乙酉十月八日、十才の時父に死別、翌年天保六年九月六日京都松原大丸下村店へ奉公に出て十七才迄勤める。帰敦後高木家の養子となり五年目にして、弘化三年三月大普請を行う。嘉永元年二十四才で結婚、同年東浜の肝煎となっているが、同六年二十九才の時には眞禪寺に於て善光寺講永代五百人講を成就している。高木家の菩提寺は櫻曲の遠慶寺であるが、眞禪寺の覚隆上人を師と仰ぎ教えを乞うていたものと思われ

る。弱冠二十七才で牛腸番を勤めたことは先に述べたが、牛腸番とは、氣比神宮の例大祭の執行の総責任者のことで、六月十六日の牛腸祭には例大祭の山車、練物の順序を決める神事を十五区五十名の世話方が集まって行なうが、牛腸番は、自宅で他の世話方を饗応する直会を開いた。その役に選ばれる者は裕福であり、神佛に崇敬の念厚く識見豊かで人格優れた人望家でなければならず、一世一代の名譽とされていたのである。一方細工昆布仲間を代表として藩候、將軍家献上品を調製した事は既に述べたが、安政二年に入り、十月四日彼が新作として売り出していた菓子昆布「越の雪」を孝明天皇及び皇后に献上して絶賛を博することになる。それが後に栗田御殿に出入を許され、菊の御紋の使用を認可されることにつながるようになるが、孝明天皇より献上の褒美として、天皇御使用の草履及び「かたしろ」を拝領し大いに面目を施したのである。その草履は善兵衛自筆の由来記と共に敦賀の眞禪寺に伝わっており寺宝となっている。その由来記には次の様に述べられている。

御草履之御由来書

安政二乙卯年九月、山村玉泉寺ノ庵主法閻尼御弟子に御茶さまの娘こと法寿尼と申ス、右法閻尼さま夏之頃当家にて菓子昆布之箱入を御買上成て右御茶さまへ進上被致候処、御茶さまより女御様江御奉備候處、殊の外御賢慮ニ相叶ひ候由、御咄し被成、尤御内々ニ而御献上も出来可申趣、御申越被成下候、右ニ付予思ふに此世に産出テ其御高恩ヲ思わずして年月ヲ送るが怨しく聊なり共御恩報之印迄と思ひ御献上之大願発し—中略—

御献上之箱ニツ 御献上左之通り
今上皇帝様江 越の雪 一箱
女 御様江 同 一箱

清淨製にして桐の足付七寸五分

尤京都ニ而献上台ニツ新求、御茶さまの出入藤原久兵衛方ニ法閻、法寿尼共旅宿致、十月二日に御献上奉願上候處、四日正四ツ時ニ而御尊前江奉備 五日七ツ時ニ御宝美として上様朝日御出迎之御草履、御ナデモノ 御公家様本衣速ニテ三宝ニ乗、菊ノ御紋付ノ御ユタンをかけ被為成 御下り被在為し御事也、誠ニ以前代無類之難有御事に候故、十一日朔

日子山村庵主さま御迎ニ奉参上候、右御献上之大願成就仕候のみか米屋善兵衛之家之あらん限り御守り奉べし、其國中に在て第一の宝と可相成と被仰聞、誠ニ難有事限りなし、此御恩報之御為毎朝御恩拜ス

安政二乙卯年十一月 高木善兵衛正義花押
この由来記には明治元年、同三年と追記があり、由来記そのものは明治六年に眞禪寺に残したものとされるが、草履はそれ以前に京都へ引越す際、懇意であった同寺の覚隆上人に託したものであろう。ナデモノとは撫物、或いはかたしろのことで多分小袖と一緒に頂戴したのであろう。小袖の行方は判っていない。又「越の雪」については、どのようなものであったか推量の域を出ないが、明治四年

四代目田結市兵衛という細工昆布問屋が創製した「求肥昆布」の原型と思われる。現在田結建三氏が、その伝統を守って、活躍して居られるが明治初期の工場の貴重な写真を提供頂いた。(別掲)その後善兵衛は、彼の年代記によれば、元治元年三用丸と名付けた商品を京大阪に売詰め、六月には薩洲屋敷に出入し更に粟田御殿に出入を許され、三用丸に十六

菊御紋の免許を得ている。但しこの商品が如何なるものか判明していない。

さて彼の年代記によると、「文久元年舟手買物越前に相成、後下り候、幸吉丸に積入下関へ遣し候事」とあり続いて「翌年正月三國へ、米身欠、筒緋買入、六月大損失の事、七、八月再度米下り大損失之事」とある、文久元年より同二年にかけて、米・昆布等の相場の下落により、大手回船問屋、高嶋屋久兵衛に多額の借入金が残し、後には家屋敷を担保として長期返済を頼み込み、再起を図ろうとする。その証文が那須伸一郎氏所蔵の高嶋屋文書に残されているのでその一部を記載する。

奉恩借金子之事
一金貳百八拾兩也

但し通用金也
御利足御定之通り

但し米五百拾俵、筒緋七百丸、身欠三百七十本

右之金子は此間、三国表ニ而兼而米身欠、筒緋買置仕候ニ付此度右荷物積出しニ参り候ニ付奉拝借候處、実正明白ニ御座候、然ル上ハ当月廿日前後当湊へ入津仕りて賣拂、元利共急度御勘定可仕候、為後日之恩借一札依而

如件

拝借主 安田理八[㊦]
米屋善兵衛[㊦]

文久二年八月五日

萩原久兵衛 様

文久二年八月五日、居宅・蔵・他門・納蔵・家財道具一切、御用細工昆布株のすべてを引当てる一札を入れて居り、「決財品物皆悉大下落仕、無據義二付、御返納相成堅甚以難決之趣」と述べている。

再び年代記に戻れば「文久三年、三十九才明石浦海中薩州蒸気船の事あり、世上乱世之様子と相成、京都へ三用丸売弘めに行くも、動気病ひ、発ちて彦根に休居、一月三十日、帰賀致す」と述べている。

廻船業や船問屋の史料は全国的にも非常に乏しいとされており、敦賀の高鳴屋文書も貴重なものと云われているが、高木善兵衛との取引関係の資料を通して、廻船問屋と物産問屋との取引形態を知ることが出来る。

前出文久三年には、幕府の命により海防の為敦賀の茶町海岸に台場完成し大砲八門が据えつけられる情勢となる、翌元治元年、折角、粟田御殿に出入りが決まり、正式に菊の御紋

入の免許を得ながら、七月十九日兵火の為、京都店は灰燼に帰し、七月二十一日帰敦する。因みに六月十九日蛤御門の変、七月十三日第一次長州征伐始まる。続いて「元治元年十二月日水戸浪士八百人当港へ入津に付、諸大名入込み、祐光寺に於て加勢御本陣まかない方相勤候事。東浜町、西浜町」とある。既に沿海に異国船出沒、英佛米蘭連合艦隊、下関を砲撃し更に長州藩と幕府との対立が激化、京は兵火に包まれ、水戸天狗党が加賀藩に降伏する等まさに世情混沌としている中、相場は大きく変動し藩の軍用金の賦課金の増大、又水戸浪士の件に見られるような徴発人足の増加等、町人の負担は著しく重くなる。加えて藩財政の逼迫が大手回漕問屋の金融力低下をまねき、大きな相場の変動で損失を出した取引問屋の面倒が見きれなくなる。

京都店の焼失後、善兵衛は敦賀に戻るが、家庭内の不幸も重なり慶応三年九月十三日、屋敷、蔵すべて高鳴屋久兵衛に引渡すことになる。再度上京して再起を図るが、明治十二年九月、九才の一子寅之助を残して事業再興の夢も空しく無念の中に敦賀で病死する。薩

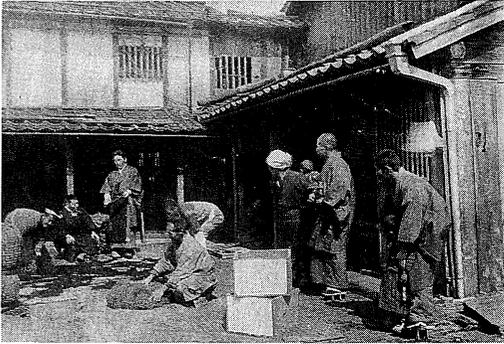
州屋敷や、粟田御殿への出入りの中で新しい時代への息吹を感じ乍ら、幕末の経済混乱期を乗り切れなかった善兵衛の口惜しさが、彼の年代記の中から伝わって来るのである。

三 まとめ

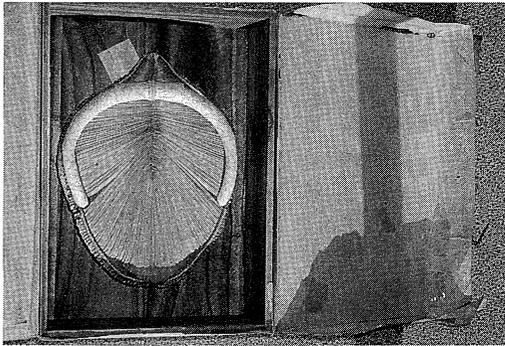
敦賀の細工昆布は現在に至るまで代表的な産物であるにも抱らず、その歴史については殆ど語られていない。その加工に携わる人は多い時は数百軒を数えたといわれているが、残されている記録は極めて少ない。表舞台の昆布ロードで活躍したのは、船荷問屋と回漕問屋であった。細工昆布の商家は比較的地味な存在であったのである。

天和二年、中村正記、正俊、正勝共者の「遠目鏡」という冊子の中には、敦賀の市井の様々な業種名が記されているが、その中に昆布屋として浜島寺町の市兵衛、同太郎兵衛、同善兵衛の三軒が載っており、何れも細工昆布屋と思われる。

何れにしても初めの細工昆布は、刻(きざみ)昆布、かき昆布のみであったが、菓子昆布の出現によって本格的な名産品となって来る。そして近世初頭以来、その伝統が製造技



明治初年細工昆布工場



高木善兵衛孝明天皇より拝領の草履

術の上でも、販路の上でも、継承されて来ており或いは藩政府や幕府の御用献上品となり、或いは京都御所への献上品ともなり、のみならず広く一般庶民の味として、その面目を保つて来た歴史を近世に見ることが出来るのである。

参考文献

敦賀貿易史稿、福井県物産誌、遠目鏡、高木善兵衛年代記、高鳴屋文書、敦賀市史
 小生浅学非才、先輩諸兄の御教示を宜しくお願い致します。